「日常生活」の呼称

小林 美恵子

1．はじめに

今年、上梓した『談話資料　日常生活のことば』（現代日本語研究会　遠藤・小林・佐竹・高橋編2016）の資料（以下【日常】とする）にみられる、発話の相手を呼んだり、指したりする言い方としての「呼称」について概観する。

小林（2011（2003））では、同じく現代日本語研究会作成の談話資料『男性のことば・職場編』（以下『男・職』）での呼称について『女性のことば・職場編』（2011（1997）以下『女・職』）とも合わせ、その使用状況を報告した。『男・職』『女・職』の談話には仕事の話だけでなく雑談も含まれるが、すべて職場で同僚や、顧客など仕事関係の人々の間で行われたものである。いっぽう、【日常】は職場での談話も多少は含まれるものの、ほとんどは家庭や、外出先で家族や比較的親しい友人などとの間で行われた談話である。このような談話の性質の違いは、人の呼び方にも影響を及ぼしていると考えられる。そこで本稿では、この職場の資料とも対比しつつ、【日常】の呼称について調査し、考えてみることにする。

日本語で呼称に用いられる語には、①対称代名詞（あなた、きみ、おまえなど）、②役職地位名（先生、社長、マスターなど）、③親族呼称（おばあちゃん、お父さん、おばさん、お兄さん、ママなど）、④姓・名を含む呼び名（姓・名の一部や変形を含む。「さん」「ちゃん」「くん」などをつけることもある）、⑤愛称（いわゆるニックネーム。姓や名の一部や変形が愛称化する場合もあり、④との境界ははっきりしないところもある）などがある。これらを総称して本稿では「呼称」とする。なお、②③④⑤については、第三者を指して他称（三人称）として使われる場合があるが、これについては考察対象とはしなかった。あくまでも対称（二人称）として相手を指す場合について考える。また、対称ではあっても、発話者が他者ないし自分のこと

ばを引用し、その中に呼称を交える場合がある。その場合、対称は必ずしも発話の相手を指すとは限らないし、自分のことばではないので、話者の属性からはかなり自由な発話が行われることも多い。そこで、これも考察の対象からははずす。つまり、発話の中で発話者が直接に目の前にいる聞き手を指したり、呼んだりする語についてのみ見ていくことにする。

2．日常生活と職場での呼称の違い

3資料のすべての発話レコードから「聞き取り不能（すべて「＃＃＃」のようにあらわされている）」や「笑い」のみの発話を除き、なんらかのことばが文字化されているレコード（『女・職』11102、『男・職』10764、【日常】26561）中にあらわれた、引用を除く呼称は745例であった。これを、『女・職』『男・職』あわせて【職場】とし、【日常】の出現数に対比して表1に示す。

表1　呼称の出現数

	あなた	あんた	きみ	おまえ	役職地位	親族呼称	姓を含む	名を含む	その他	合計
日常	22	28	8	8	22	48	53	99	10	298
職場	18	7	1	22	96	0	273	13	17	447

さらに図1ではこれをグラフ化して図示した。

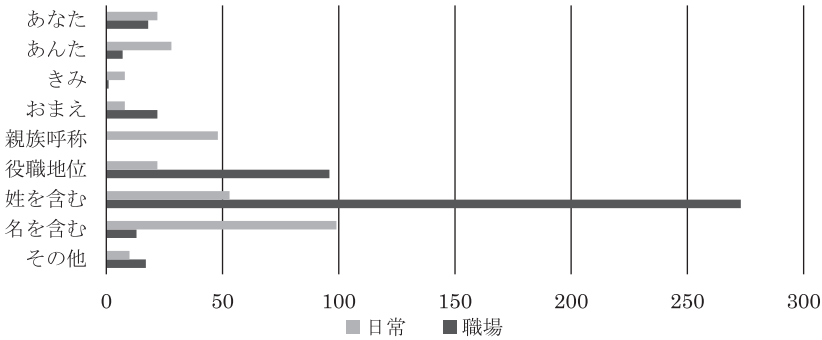

図1　呼称の出現数

表１、図１からは【職場】と【日常】での呼称のあらわれ方にはいくつかの違いがあることが読み取れる。

発話レコード数に対する呼称出現数の割合は【職場】では2.0％、【日常】では1.1％で、【職場】のほうが出現率が高いが、その多くを「姓を含む」「役職地位名」が占めている。いっぽう、【日常】には【職場】では１例もみられない「親族呼称」による呼びかけがみられる。その多くは家族に対して用いられているが、家族以外の他人に「おにいさん」「おねえさん」と呼びかけた例もある。「姓名」についても、【職場】の「姓」多用に対し、【日常】ではむしろ「名」や、その一部または変形などを含んで呼びかける例が多い。

対称代名詞については、【職場】での出現は「あなた」「あんた」「おまえ」「きみ」のみ。【日常】では、それに加えて、対称代名詞ともとれるような「そちら」「そっち」各１例がみられた（表１・図１では「その他」に分類）が、いずれにせよ、「あなた」以下の４語が現代の対称代名詞の中心をなしているといえる。ただ、そのあらわれ方については【職場】と【日常】では違いがあるようだ。「あなた」はどちらでも一定数あらわれるが、「あんた」「きみ」は【日常】に多く、「おまえ」はむしろ【職場】でよく使われている。対称代名詞が全発話に占める割合についても【日常】では呼称全体の23％（68／298）であるのに対し、【職場】では11％（48／447）にとどまっている。対称代名詞に関しては、【日常】―つまり家族間や、仕事がらみではない友人・知人間―でより多く使われている可能性がある。

３．待遇的にみる【日常】の対称代名詞

表２－１～２－４は【日常】にあらわれるおもな対称代名詞４語について、各年代・性別の話者ごとに使用者数（人）・用例数（例）と、どういう相手（呼称の指し示す人物）に対して用いられているかを整理したものである。話者における数字は年代、話者・相手におけるｆ、ｍはそれぞれ女性、男性で、表中網掛部分は男性話者を示している。なお、相手の年代・年齢の上下については協力者による判断に基づく（以下、表２～５も同様である）。

表２－１　あなた

話者	人	例	相手（年代・年齢の上下　性　関係）
40f	1	2	下 m 息子
40m	1	2	下 f 部下
50f	3	4	下 f 友人・下 f 娘・上 m 夫・下 m 息子
60f	1	4	下 f 弟子
70f	2	4	同 f 知人・下 f 娘
70m	2	4	同 m 同級生友人
90f	1	2	下 f 義妹
合計	11	22	

表２－２　あんた

話者	人	例	相手
40f	1	1	下 m 甥
50f	1	2	下 f 娘
60f	1	2	下 f 娘
60m	1	2	上 f 妻
90f	1	21	下 f 義妹
合計	5	28	

表２－３　おまえ

話者	人	例	相手
10m	1	1	上 f 姉
20f	1	1	同 m 友人
20m	4	5	同 m 友人
40m	1	1	同 f 妻
合計	7	8	

表２－４　きみ

話者	人	例	相手
40f	2	6	同 m 夫・下 m 息子・下 m 甥
60m	1	1	下 mf 娘、娘の夫
70f	1	1	下 m 孫
合計	4	8	

「あなた」「あんた」「きみ」は40代以上の話者にのみ使われ、30代以下の使用例はみられない（引用としての使用例は存在するので、もちろん若年代の話者がこれらの語を知らない・使わないというわけではない）。話者は男性よりも女性のほうが多い。相手については、「あなた」で年上の夫を呼んだ１例、「あんた」で年上の妻を呼んだ１話者２例、「おまえ」で弟から姉を呼んだ１例以外は、４語とも、すべて同年代以下のものに対して使われている。また、「あんた」「きみ」は家族・親族内だけで使用されている。

日本語の対称代名詞が目上の者に対して使えないことは周知である（あえて使うとすれば、「喧嘩を売る」とか「慇懃無礼」などの意を含むことになってしまう）。30代以下（若年代）が使わず、使用が40代以上（高年代）に偏るのは、年齢が上がるとともに「目上」の相手が少なくなっていくことによって使いやすくなるということだろう。また、対称代名詞は、たとえ「目下」ではあっても親しくない者、敵対する者に呼びかけると相手を下に見た

ということを強調し、「喧嘩腰」「非難がましさ」を喚起する可能性がある。親しい家族内にしかあらわれない対称代名詞の存在はこのことと関係していると考えられる。

日本語では、それぞれの対称代名詞は使用者、使用の相手との関係などにある種のステレオタイプがあり、それにあてはまらない関係ではきわめて使いにくい。どの語を選ぶかによって、話者自身や相手との関係が規定されてしまうからである。それゆえに呼称における対称代名詞の出現率は少ない。そして、それを補うものとして「役職地位名」「親族呼称」「姓名を含む呼称」などが用いられるわけである。

日本語の対称代名詞のステレオタイプは、おおむね以下のようなものと考えられる。

★対称代名詞のステレオタイプ

対称	話者	対者	共起話体	対応する自称	語（を含む文）のイメージ
あなた	女・男	同等以下	敬・常体	わたし・ぼく	やや親しい／あらたまり
あんた	女・男	同等以下	常体	あたし・おれ	親しい／ぞんざい・気軽
おまえ	男・(女)	同等以下	常体	おれ・(わたし)	親しい／上から下へ
きみ	男	同等以下	敬・常体	ぼく	やや親しい／とりすまし

【日常】の対称代名詞もおおむね、このステレオタイプにあてはまるものとして用いられているが、すべてがあてはまるというわけではない。以下に各語について、話体や対応する自称詞の様相も含めながら、その使用の特徴を述べ、ステレオタイプに「あてはまらない」例についても検討していく。

3．1　「あなた」

表２－１にみるとおり、「あなた」は、女性・男性を含む話者から、同等以下のものに使われているという点においてはステレオタイプの範囲内での用いられ方がされている。すべての年代の話者で、家族・親族内の年下のものに用いられているほか、部下、弟子など社会的地位が下のものに対して用いられ、これはこの語の使用の意識に年齢や地位の上下による選択の意識があることを示しているといえよう。

「あなた」には以下の例のように相手への指示・批判などの文脈で用いられているものも目立つ（８／22）。親しい相手ではあるが、上位的立場に立つからこそ、指示・批判などが遠慮なく行えるのであり、「あなた」という呼びかけがそこに力を発揮している。以下の（2）～（5）では、実は「あなた」を言わなくても文意は通じる。小林（2001）では、対称代名詞の排他的指示機能として、あえて対称代名詞で呼びかけることにより相手を他から取り立てて強い命令や批判をあらわすことがあるとしたが、【日常】にも「あなた」に限らず、このような例がみられる。

なお、以下用例文中の［　］は注記、用例末（　）内は話者と対者（相手）を示し、（　）内の［　］は【日常】におけるファイル名を示す。

(1) あたしは、染められないから、あなたが買って。
（［50F303］60f 裂き織りの師→50f 弟子）

(2) その、みそを食べなさいつってんの［と言ってるの］、あなた。
（［50M202］50f 母→30m 息子）

(3)「うん」じゃないでしょ、あなた［笑いを含んだ声で］。
（［70F103］40f 母→10m 息子）

(4) だから、あなたそれ［韓国への航空券］行くんだったら、早く、しないとー、取れないよ。（［50F202］50f 母→10f 娘）

(5) ああ、紅玉、あなた煮ればいいじゃない。
（［50M103］50f 妻→50m 夫）

(5) は妻から夫に呼びかけたものである。妻から夫への「あなた」は日本語では従来よく行われた典型的な呼びかけの一つかと考えられるが、【日常】に登場する19組の夫婦の談話中にあらわれた妻から夫への「あなた」はこの１例のみであった。40代以下の夫婦では、名前や「［名（の一部）］ちゃん」、愛称で呼び合った例があり、50代以上では「パパ」「お父さん」と呼んだ例がみられるが、対称代名詞での呼びかけは少ない。(5) の夫婦でも、この１例以外に夫婦間での呼称はあらわれない。しかも、この唯一の例が提案的な

ものとはいえ、夫に対する行動指示であるのは興味深い。

なお、「あなた」では、70代の男女が同年代の知人や友人に呼びかけた例が、複数話者に複数例みられる。この場合、話者は相手の上に立っているという意識はないはずである。話者が高齢に達し、多くの相手に対して、いわば「目上」になったとき、呼称の選択は、少なくとも上下の意識からは自由になっていくと考えられる。その場合、ややあらまった丁寧さをもって使うことができる「あなた」は同年代の知人・友人などに対しても使いやすい呼称となっていくのではないだろうか。

(6) あな、あなたの結婚式、ほら○○［地名］でやったじゃない？
（[70M101] 70m→70m 高校同級生友人）

(7) それは、みんなそうなんだけどさ、さすが△△［70m 姓呼び捨て］は、いちばん記憶力がいいな。（[70M101] 70m→70m 高校同級生友人）

(6) と (7) は直接のやりとりではないが、同一場面で話者と対者（相手）が交代して行われたものである。(6) の話者は相手（(7) の話者）に「あなた」と呼びかけているが、(7) の話者は相手（(6) の話者）を姓で呼び捨てている。ちなみにこの場面は高校時代の同級生４人の男性の談話であるが、そのうち２人は発話の相手に「あなた」と呼びかけ、他の１人は姓を呼び捨て、もう１人は姓に「くん」をつけている。彼らの会話スタイルは一部敬体をまじえつつ常体基調、「あなた」話者の２人の自称詞は「おれ」中心で「わたし」を１、２例交えており、呼称のステレオタイプからは、はずれたところもある使い方である。

彼らはかつての同級生という共通項をもちながらも、50年以上にわたる交友期間においてはそれぞれの生活や個性を培っていたはずであり、それらの個性を尊重し合いながら親しい中にも一定の距離をもつ付き合いをしていると考えられる。ことばの選択にも共通項とともに、それらの個性や距離感が反映している可能性がある。それが、呼称や自称詞の選択に影響を与えたと考えられる。

３．２　「あんた」

表２－２における「あんた」28例はいずれも家族・親族間で用いられているが、その出現には３つのタイプがある。

まず、年長の母や叔母が年少の娘や甥を呼んだ例で、これは一応ステレオタイプにあてはまる用いられ方といってよいだろう。

２つめは60代の夫が同じ60代の妻（夫は、妻が年上としている）を呼んだ「あんた」である。男性が妻・恋人など親しい関係にある女性を呼ぶ「あんた」は【日常】ではこの１話者２例だけであるが、実際の社会において他に例がないわけではない。小林（2000）では、TV ドラマ『ビューティフル・ライフ』の男性主人公が、恋人となる女性を、初対面での「あなた」から親しさの度合い、距離の変化に応じて「あんた」「おまえ」と呼び方を変えていくようすを観察した。「あんた」は「あなた」ほどには、あらたまったりよそよそしくはなく、「おまえ」ほどには無遠慮ではない語として用いられていた。実際の日常生活でも妻や恋人を、相手を下にみる色合いのある「おまえ」では呼びたくないという意識がこのような対称を選ばせていると考えられる。

３つめは関西弁話者の90代の女性が70代の義妹と話す場面にあらわれる「あんた」である。実は、これが28例中21例を占め、もっとも多い。これも同等以下への親しく気軽な呼称という点ではステレオタイプにあてはまるが、高齢の関西弁話者によるという特殊性も無視できないと思われる。この話者には「あんたさん」と「さん」をつけた１例がみられ、また、同一発話中の「あなた」と「あんた」の混用もある。対応する自称詞は１例の「あたし」を除きすべて、よりあらたまった形といえる「わたし」である。

(8) なあ、<u>あんたさん</u>は頭が違うねん。　（［70F202］90f 義姉→70f 義妹）

(9) <u>あなた</u>が一番気の毒な、<u>あんた</u>、来とってな「あれがないようなった」「これがないようなった」言（ゆ）うやんかー。

（［70F202］90f 義姉→70f 義妹）

これらからみると、この話者は、一般的な「あんた」よりは、ぞんざいでないニュアンスでこの語を用いているようだ。これはやはり高齢になったことにより呼称の選択が自由になった（すべての相手が「目下」である）ことと、関西弁話者であることを要因として、いわば、この話者の個性として「あんた」の多用が行われていると考えられよう。これに対する共通語話者としての義妹は、義姉を「あなた」とも「あんた」とも「おねえさん」とも呼ばず、呼称を用いずに話している。

３．３　「おまえ」

表２－３にみるとおり、「おまえ」は他の語とは違い、話者はすべて40代以下で、１例を除き男性のみである。相手はすべて同年代以上であり年下を呼んだ例はない。また、８例中６例までが、家族・親族ではない男性の友人を呼んでいるのも他の語とは違うところである。他の３語がその選択の基準を相手との上下関係においているのに対し、「おまえ」の場合はむしろ「親しさ」がその基準となっている。

「おまえ」のステレオタイプには上下関係で用いられるものと、親疎関係で親しいものどうしで互いに用いられるものとがある。明治以後の日本語では上下関係を基準に上位者（男女）から下位者（妻・弟妹・子ども・部下・後輩など）を指した「おまえ」が一般的で、親しい同位の男性どうしでは「きみ」（「ぼく」）が普通だったが、戦中の軍隊での「貴様」（「おれ」）を経て、戦後男性どうしの親しい関係で用いられる「おまえ」（「おれ」）が一般化した。さらに現代に至り、女性にも親しい関係での「おまえ」が用いられはじめているようだ。小林（2006）では小説・ラジオドラマ・映画等の台詞の観察により、以上の経過を詳述した。【日常】でも、以下の（10）（11）のように、同一場面で男子大学生の友人どうしが互いに「おまえ」と呼び合っている。

（10）ああ、でも、一番アホなのおまえだよね＜笑い［複］＞。

（［SM201］20m→20m 大学同級生）

（11）あ、でも、そっか、おまえ、授業で聞いたって。

（［SM201］20m→20m 大学同級生）

なお、（11）の話者は（10）の話者を「［姓］（呼び捨て）」でも呼んでいる。ともに常体で話し、２人の間にはもちろん、上下の意識は存在しない。

従来のステレオタイプにあてはまらないものとしては、次のような例がみられる。

（12）おまえよりは軽いわ↓。　（［20F201］20f→20m 友人）

（13）おまえ一緒に見ないと消せないし。　（［SF101］10m 弟→20f 姉）

（12）は、20代の男性２人、女性２人の友人どうしがドライブ中の車内で、女性が男性の友人を「おまえ」と呼んだもの。ここでは終助詞「わ」も下降調のイントネーションで、いわゆる女性文末形式ではない。この会話の場面に男性から女性を「おまえ」と呼んだ例はないが、男性から男性への「おまえ」はみられるし、「おまえ」以外の呼称としては女性から女性・男性、男性から女性に「［名］（呼び捨て）」が用いられており、呼称の面で男女差はみられないといってよい。全体的な口調も男女ともにへだてのない常体基調で遠慮のない会話である。

この話者は別の場面で、職場で先輩同僚と話し、家で両親と話している。前者では敬体基調で呼称は用いず、後者では常体基調だが、父を「お父さん」と呼ぶなど、場面によることばの使い分けをしている。つまり、「おまえ」という対称代名詞は親しく同じような口調で話す友人たちとの会話という場であることによって使われたとみることができる。

（13）は10代後半の弟が20代前半の姉を呼んで、一緒にビデオをみないと、そのビデオを消去できないと言ったものである。文脈からは弟が姉に威張ったり、バカにしたりというようすはみられない。年齢も近く、ともにビデオを楽しむような、趣味も近い姉弟間の上下関係を超える親しみの意識が、弟の呼称の選択を支えているのであろう。この場合、実際に姉が弟を呼んだ例

は出てこないが、こちらも「おまえ」と呼ぶということは十分にありうる。

なお、【職場】でも「おまえ」は他の対称代名詞に比べて多用されていた（表１）。しかも、「おまえ」はどの職場にも一様に出現するわけではなく、デザイン事務所、保険代理店など特定の職場に偏って出現し、会議・打ち合わせや雑談などの場面にかかわらず用いられ、また、「［姓］（呼び捨て）」「［名］（呼び捨て）」がともに使われるという傾向があった。これらの職場でのおもな発話者は、比較的年代の近い男性どうしが中心で、仲間内の遠慮のない関係があるのではないかと小林（2011（2003））では論じた。上下よりは親疎の意識によって用いられているという点で、【職場】も【日常】も共通し、これは現代の「おまえ」の使用の傾向ということもできるだろう。

こうした中で、【日常】には１話者１例だけだが夫が妻に対して「おまえ」と呼びかけた例がある。

（14）おまえが持ってるの？↑　　（［70F103］40m 夫→40f 妻）

夫から妻への「おまえ」は、上位者として下位者を遇する旧来的なステレオタイプといえる。【日常】では、他にはまったく例をみない。

３．４　「きみ」

表２－４にみるとおり、【日常】の「きみ」の使用は４話者８例あるが、このうち60代男性が娘とその夫の２人を呼んだ１例を除く３話者７例は、実は同一の場面［70F103］で出現している。発話者は70代女性と40代のその娘、息子の妻の３人。いずれも女性である。相手は、40代の娘の夫が妻から２例呼ばれているほかは、すべて一家で最年少の10歳の少年で、話者にとっては孫、甥、息子ということになる。この少年の誕生祝いに集まった祖母、叔母夫婦と少年一家３人、全部で６人の談話である。

この場面で祖母は孫を「きみ」のほかに「［名の一部］ちゃん」とよび、叔母は甥を「［名］（呼び捨て）」と呼んでいる。また少年の父は「［名］くん」と呼び、母には「きみ」のほかに息子を「あなた」と呼んだ例もある（前出

例（３））。なお、祖母は娘の夫を「［名の一部］くん」、息子の妻を「［名の一部］ちゃん」と呼んでいる。また、娘は母を「ママ」と呼び、息子の妻は夫を「パパ」とも呼んでいる。なお、前節３．３で触れた夫から妻への「おまえ」もこの場面で娘の夫が娘（妻）を呼んだものである。つまり、この場面ではステレオタイプにあてはまるもの、あてはまらないものを含め、さまざまな呼称があらわれる。家族間の親しく自由な、遠慮のない批判などもできるような雰囲気の中で、さまざまな呼称が状況や話題に合わせ選ばれているのだろう。

「きみ」は、その中でも年の離れた若い相手（少年）に、冗談混じりながら揶揄や非難をこめるような文脈で使われているようだ。

（15）待ってましたよー、きみー、きみの帰りを。

（［70F103］40f 母→10m 息子）

（16）［年が］下がってくるの？、きみの場合。

（［70F103］40f 母→10m 息子）

（17）ええーー、きみー［少し非難がましく］。（［70F103］40f 妻→40m 夫）

（15）は誕生日祝いに来た人が待っているのに帰りが遅かった息子を、母が冗談交じりになじっている。（16）も同じ発話者で、息子が間違えて今日が９歳の誕生日だと言ったのに対して、その勘違いを揶揄する文脈。同様に、（15）の前後、息子と一緒に帰ってきた父（自分の夫）が息子を促さず、ともに帰りが遅くなったことに対しての発話が（17）で、この場合はあえて年少の息子と同じように呼ぶことにより、息子と同じような行動をとる夫への批判の意図を冗談的にではあるがあらわしているといえる。

これらは「きみ」のステレオタイプにはあてはまらない用いられ方といえよう。ステレオタイプの「きみ」とは男性から同等以下の相手を指す、たとえば上司から部下、男性から妻や親しい年下の女性、また戦前の親しい男性どうしの友人間などに用いられたようなものである。ただし、これらは小説やドラマなどの台詞にみるほどには実際の生活の中では用いられることはないように思われる。【日常】では以下の１例のみがそれにあてはまる。

（18）やあ、きみらが面倒みてやんなさい。

（［30F202］60m→30f 娘・40m 娘の夫）

ここでは60代男性が娘とその夫に指示の文脈で用いている。年の離れた下の相手に、ややとりすまして言った感じがある。娘だけでなく、やや遠慮のある娘の夫相手であることが影響した呼称の選択と考えられる。

４．その他の呼称

「役職地位名による呼称」「親族呼称」について簡単に触れておく。

前述のとおり、【職場】では多用されていた役職や地位名により相手を呼ぶ呼称は、【日常】では限られた例しかみられない。表３－１にみるとおり、あらわれたのは「先生」22例のみで、それぞれの話者にとっての何らかの教えを受けている師、子どもの先生、また教師である元同僚を呼んでいる。話者は各年代にわたっているが、相手は話者より年下も年上もいる。年齢の上下よりは教えを受ける立場と与える立場の差が呼称を決めている。

親族名による呼称は、役職・地位による呼称とは逆に、【日常】にのみみられ、【職場】にはあらわれない。そのほとんどは家庭内で家族に対して用いられており、話者は全年代・男女にわたるが、40代を境に、それより下の話者では「お父さん」「お母さん」「パパ」「ママ」で親に呼びかけ、40代から上になると同じ呼称で夫や妻をあらわすようになるのが、当然といえば当然のことだが、はっきりとあらわれている。「お姉ちゃん」も10代は姉を呼び、50代では娘を指して呼んでいる（表３－２）。

また、しばしば日本語の呼称の特徴とされる、親族名によって他人を呼んだ例も３者３例であるがみられた。２例は50代女性が、自宅に来た PC の業者に「おにいさん」、買い物中店員に「おねえさん」と呼びかけたもの。もう１例は70代の男性が、知人夫婦との談話中に、夫を「お父さん」と呼ぶ知人の妻と同じように、知人を「お父さん」と呼んだもので、半分は知人の妻に向かって話しているのでもあるようだ。このような呼び方は若い世代にはまったくみられなかった。以下表３－１、３－２に概要を示す。

表３－１　役職・地位による呼称

話者	人	例	呼称（指し示す人物）
20f	1	2	先生（上ｆゼミの指導教師）
40f	1	1	先生（上ｆ元同僚）
50f	2	18	先生（下ｆ娘の舞の師） （上ｆ裂き織の師）
60m	1	1	名先生（下ｆ中国語講師・中国人）
合計	5	22	

表３－２　親族呼称

話者	人	例	呼称（指し示す人物）
10f	1	1	お姉ちゃん（姉）
20f	2	3	お母さん（母）お父さん（父） ママ（母）
30f	2	2	お父さん（父）ママ（母）
30m	1	2	お父さん（父）
40f	4	21	お父さん（父）ママ（母） お母さん（母）パパ（夫）
50f	2	5	お姉ちゃん（娘） お兄さん（下ｍ業者） お姉さん（下ｆ店員）
60f	3	10	お父さん（夫）パパ（夫）
60m	1	2	パパ（夫）
70m	1	2	お母さん（妻） お父さん（同ｍ知人）
合計	17	48	

５．姓名による呼称

日本語では使用しにくい対称代名詞を補い、【職場】でも【日常】でも呼称の大きな部分を姓（名字）や名（ファースト・ネーム）によるものが占めていた。しかしそのあらわれ方は２でも述べたとおり、かなり違った様相を示している。ここではそれについてさらにみていく。表４は姓・名それぞれにどのような接尾語（さん、くん、ちゃん）がついて用いられているかを示し、さらに図２－１、２－２で、その【日常】【職場】それぞれでの出現率を示した。

表４　姓名による呼称の出現数

	姓 さま	姓 さん	姓 くん	姓 ちゃん	姓 呼捨	名 さん	名 くん	名 ちゃん	名 呼捨	愛称	合計
日常	1	*40	1	3	8	*9	*5	*43	41	9	161
職場	0	229	16	20	8	5	1	7	0	6	292

・表中＊をつけた数字については、その一部や変形に該当の接尾語をつけたものを含む。ちなみに「［姓の一部］さん」２例、「［名の一部］さん」１例、「［名の一部］くん」４例、「［名の一部、または変形］ちゃん」37例がみられた。
・１例みられた「［名］りん」については、愛称に入れた。

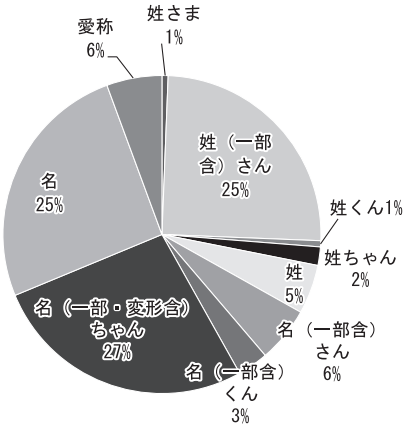

図２－１【日常】の姓名による呼称

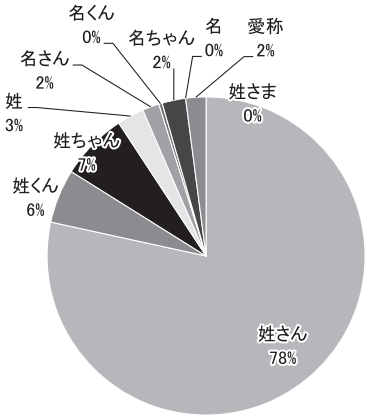

図２－２【職場】の姓名による呼称

表４、図２－１、２－２にみるとおり、【職場】では姓名のうち、姓を含む呼称が90％以上を占め、なかでもそのほとんどが「[姓］さん」である。名を含む呼び方は全部で13例、6.5％にすぎない。いっぽう、【日常】では「[姓（姓の一部を含む)］さん」も25％ほどみられるものの、名を含む呼称が70％近くを占めている。なかでも「[名］(呼び捨て)」や「[名（名の一部や変形を含む)］ちゃん」は【職場】ではそれぞれ０、７という少ない出現数で、【日常】に特徴的な呼称といってもよいだろう。ここで、「[名］ちゃん」と「[名の一部・変形］ちゃん（くん）（さん)」などを一括して扱うのは、２音節名の多い現代日本の命名では「ちゃん（くん）（さん)」に前接する２音が名の一部なのか全部なのか、資料の上からは明確な区別をつけられないからである。同様に「[姓の一部］さん」（２例）なども「[姓］さん」と一括した。なお、【日常】【職場】の資料では、固有名詞については具体名を表示していない。名か名の一部（変形）か、名の変形を変形とするのか愛称とするのかは、資料作成時の文字化担当者の判断による。

なお、【日常】には【職場】ではあらわれなかった「[姓］さま」が１例だけ出現したが、これは補聴器店の店員が顧客を呼んで言ったものである。

次に【日常】で多く見られた「[名］(呼び捨て)」「[名（一部・変形を含

む)］ちゃん」「［姓（一部を含む)］さん」についてその使用のようすを、表５－１、５－２、５－３としてまとめる。

表５－１［名］呼び捨て

話者	人	例	相手（年代・性・関係）
20f	3	12	同ｍ友人　同ｆ友人
20m	2	3	上ｆ妻　同ｆ友人
30f	1	1	下ｍ夫
30m	1	1	同ｆ妻
40f	2	11	下ｆ娘　下ｍ甥
40m	2	3	下ｍ部下　同ｆ妻
50f	1	2	下ｆ娘
60f	3	6	下ｆ娘
80m	1	2	下ｆ孫
合計	16	41	

表５－２［名（一部・変形)］ちゃん

話者	人	例	相手（年代・性・関係）
10f	1	1	上ｆ姉
20f	6	9	同ｆ友人　同ｍ友人 下ｆ友人
30f	1	1	上ｆ姉
40f	3	3	同ｍ夫　下ｍ甥
40m	2	4	下ｆ妻の姉　下ｆ部下
50f	2	13	下ｆ部下　下ｆ娘
60f	1	5	下ｍ孫
70f	2	7	下ｆ孫　下ｆ息子の妻 下ｍ孫
合計	18	43	

表５－１からは「［名］（呼び捨て)」の話者が70代を除くすべての年代・性別にわたっていることがわかる。その相手は20代では友人、20～30代では夫婦どうし、それより上の世代では娘など年下の家族中心になる。これは「［名（一部・変形)］ちゃん」でもほぼ同じで、若年代が友人中心に使っているのに対し、高年代では年下の家族（60～70代では特に孫に対するものが目立つ）が中心になる。「［名］（呼び捨て)」と異なるのは、部下など仕事関係の年下の相手にも使われていること、また話者がどちらかというと女性中心であることだ（表５－２)。

３．３節では「おまえ」と呼び合う話者を含む４人の男女の友人どうしが「［名］（呼び捨て)」でも呼び合っている例［20F201］を紹介した。対称代名詞の使いにくさを前提とすれば、「［名］（呼び捨て)」は「おまえ」を使うような待遇的レベルで「おまえ」の代わりに使われている可能性がある。同様に女性が年少の家族を呼ぶ語としては「［名（一部・変形を含む)］ちゃん」が「あんた」や「あなた」の代わりに使われていると考えられる。

表５－３［姓（一部を含む）］さん

話者	人	例	相手（年代・性・関係）
20f	1	2	上ｆ同僚
30f	3	4	上ｍ同僚　上ｆ同僚　上ｍ上司
30m	4	9	上ｍ上司　上ｍ先輩（テニス）
40f	4	5	同ｆ同僚　上ｆ友人　下ｆ部下　上ｍ編集者
40m	2	3	上ｆ顧客　下ｍ顧客
50f	1	5	下ｆ部下　上ｆ弟子の母
50m	1	1	下ｍ友人
60f	1	1	下ｆ弟子
60m	3	6	上ｍ先輩（テニス）　下ｍ友人　同ｍ友人
70m	2	4	下ｍ後輩（テニス）　同ｍ・下ｆ知人夫婦
合計	22	40	

表５－３にみる通り、「［姓］さん」も話者の年代・性別を問わずに使われているが、20～50代までは上司、同僚、部下、顧客など職場関係の相手を呼んでいる例が多い。これは【職場】で「［姓］さん」が圧倒的に使われていることとも一致し、この語が職場などで相手の上下を問わずもっとも一般的な呼称として使われていることを示している。

ただし、【日常】の30代以下では、「［姓］さん」を友人に対して使った例はみられない。友人どうしでは「おまえ」「［名］（呼び捨て）」「［名（一部・変形を含む）］ちゃん」などで呼び合っているのである。しかし、高年代になると、友人間で「［姓］さん」を使う例がみられるようになる。共通の趣味や生活などを介してへだてのない親しみを示す若年の友人関係と、親しみを持ちつつも、それぞれが経験してきた暮らしや個性によって一定の距離を置く高年の人間関係がこのような呼び方の違いに反映しているのであろう。なお、60代以上で、職場関係の相手への「［姓］さん」の例があらわれないのは、退職などにより職場での会話自体がなくなったことにもよると考えられる。

6．おわりに

【日常】にあらわれる呼称は以下の点で【職場】とはその趣を異にしている。まず、対称代名詞の使用頻度が【職場】よりは大きいこと。次に役職・地位による呼称が少なく、親族呼称によるものが多いこと。さらに姓による呼称が比較的少なく名による呼称が多いこと。これらはいうまでもなく、職場のみに限られた人間関係によるのでなく、家族や親しい友人どうし、また職場も含む【日常】の談話場面のバリエーションが反映したものといえる。特に家族間の談話が多いことが、上下関係を如実に示してしまうような対称代名詞の使用や「呼び捨て」「ちゃん」の多用などにつながっていると考えられる。

以上は特に意外な結果とはいえない。呼称の使用はおおむね私たちのもっているステレオタイプのイメージの中で行われている。ただし、特に対称代名詞では従来のステレオタイプにはあてはまらないような例も見出された。比較的制約を感じず、自由に呼称を選べるような家族・友人間などの談話場面では新しいタイプの対称代名詞の発生・変化が起こっていく可能性を感じることができる。

参考文献

現代日本語研究会（1997）『女性のことば・職場編』ひつじ書房

現代日本語研究会（2003）『男性のことば・職場編』ひつじ書房

現代日本語研究会（2011）『合本　女性のことば・男性のことば（職場編）』ひつじ書房

現代日本語研究会　遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・髙橋美奈子編（2016）『談話資料　日常生活のことば』ひつじ書房

小林美恵子（2000）「対称詞の諸相―TV ドラマ『ビューティフルライフ』に見る」『ことば』21　pp. 24-36　現代日本語研究会

小林美恵子（2001）「排他的指示機能からみた対称詞」『ことば』22　pp. 67-77　現代日本語研究会

小林美恵子（2003）「職場で使われる呼称」『男性のことば・職場編』pp. 99-119　ひつじ書房

小林美恵子（2006）「「おれ」と「おまえ」の共同体―その変貌と拡大」『ことば』27 pp. 90-110　現代日本語研究会

小林美恵子（2011）「職場で使われる呼称」『合本　女性のことば・男性のことば（職場編）』pp. 99-119　ひつじ書房

（こばやし　みえこ・早稲田大学）